

連載

61 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (64歳・内科)

タブーに出くわす“認知症老人の性” 大人の仕草を在宅医は見た。

最近になって、独居高齢者の金銭トラブルや被害状況がマスコミを賑わせています。その手段として、男女の関わりが社会通念を著しく逸脱した事例が多く見られるようになってきました。



平成13年ごろの話です。Iさん(昭和7年生まれ・男性・独居)には、脳出血後遺症、頸椎・脊髄障害による認知力低下、運動障害がみられ、在宅医療のため自宅訪問をしていました。

ある日の定期訪問診

療時のことです。いつものように、声をかけながらドアを開くと、Iさんは楽しそうに笑いながら入浴していました。他事業所の女性ヘルパーさんが、生まれたままの姿で入浴介助されているのがガラス越しに見え、いたたまれなくなった私は、思わずドアを閉めたのです。当然のごとく、その日の診療は遠慮させていただきました。

しばらくして、その女性からIさんへ多額の借金の申し出があったので、高金利にも関わらず至急お金を工面し、渡したのだそうです。しかし、その後急にその女性は現れなくなったのです。

平成10年ごろ認知症のYさん(明治41年生まれ・男性・独居)に起こったのは、さらに凄まじいものでした。

近所で知り合った、親切的な50歳代の女性(自

称:踊りの先生)が、毎日家まで来てくれて、優しく話し相手になってくれていたようです。それがとても嬉しかったのでしょうか、マンション1室にあたる程の高額な借金をたのまれ、引き受けたのだそうです。近所に住んでいる息子・娘さんがそれを聞き、唾然とするも後の祭りだったので。そして、Yさんの以後の生活管理も含め、当院が在宅医療で訪問を開始すると、女性は二度と現れることはなかったのです。

在宅医療を開始して延べ20年になりますが、男女逆のケースもあるなど、他にもたくさんの同様なケースに出くわしています。

高齢者(男性)が全財産を40歳代の子持ちの女性に貢いだ後、逆にスーカー行為だと言われ、自ら天国へと旅立ってしまったことがあります。

それは、今でもその時何とかならなかったのだろうか、残念な思いという言葉では片付けられないほどの、後味の悪い悲惨な出来事でした。

20年ほど前、東京で、元日本医師会長 武見先生の肝いりで開催された「医療環境研究会」のテーマに「老人の性」の問題がありました。厚生省の研究班がデータを示しながら、今後の問題として各種年齢別の性行動シミュレーションを行っていました。

2025年には、大量の“団塊の世代”の大人の仕草問題が、いろいろなセクションで発生するでしょう。だからこそ、地域市町村の包括ケア会議などで英知を出し合い、あらゆる高齢者被害予防対策を実施し、安全・安心な住みやすい生活環境とすべきではないでしょうか。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 19名
(常勤6名、非常勤13名)

内科・外科専門医 16名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>